

【研究報告】

龍門文庫蔵『公事根源抄』江戸初期写本
翻刻 卷上（一）

広島大学 日本語史研究会

一、龍門文庫蔵『公事根源抄』について

ここに翻刻する『公事根源抄』は、奈良吉野の阪本龍門文庫に蔵される、江戸時代初期の写本である。ただし、武井和人『中世古典籍学序説』（二〇〇九年、和泉書院）141頁は、「室町末期写」とする。

『公事根源抄』は、一条兼良（二四〇二―一四八二）最初の著作と言われ、多数の写刊本が現存する。元禄七年（一六九四）には、注釈書である松下見林『公事根源集釈』が刊行されている。

他の写刊本・注釈書・翻刻等については、『日本古典文学大辞典』（一九八三年、岩波書店）や、国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベースほか、右の武井著書を御参照願いたい。

龍門文庫蔵本は、現存諸本中、比較的古い写本である。龍門文庫本の書誌等は、川瀬一馬編著『龍門文庫善本書目』（一九八二年、阪本龍門文庫）とインターネット上の阪本龍門文庫善本電子画像集の解説に詳しい。本資料は、この電子画像集・古写本の部に全文公開されている。その公開画像から、ほとんどの漢字に振り仮名が振られ、濁点も加点されており、日本語史的な価値が高いことが知られる。そこで、広島大学日本語史研究会は、インターネット上のカラー写真に基づき、本書の輪読を進めてきた。本翻刻範囲輪読時の会員は、佐々木勇・本間啓朗・大場和香・岡村和奈・榎本由貴・土肥新一郎・早田奈美・

宮崎若菜・片平帆紀・難波周子・山口倫香である。

しかし、公開されている画像では、振り仮名や濁点に判然としない点が残る。また、公開画像では見えない綴じ目の文字も少なくない。そこで、原本閲覧を願ひ出、研究会会員が分担して、数度に亘って不明点を原本で確認した。原本閲覧調査には、佐々木勇・本間啓朗・土肥新一郎・山口倫香があたった。幸い、龍門文庫から翻刻の許可も頂けたため、龍門文庫蔵本の翻刻文を学界の研究進展のため、数回に分けて、公にする次第である。今回は、巻上前半の翻刻を公表する。

（以上、佐々木勇）

〈凡例〉

一、本翻刻は、龍門文庫『公事根源抄』（龍門文庫二〇八）原本に基づき、その全体を、現行の字体に改めたものである。仮名遣いは、原本のままとした。

一、本資料の振り仮名は、「つ」と「ッ」（舌内入声音と促音）とを、原則として使い分けている。そのため、翻刻でも、両者を区別した。一、本資料の濁点は、「・」と「…」とがある。何らかの使い分けがある可能性は存するものの、翻刻ではこの両者を区別していない。一、虫損等のために文字が欠けている箇所は「」で括り推読であることを示し、翻刻上の注も、当該箇所「」に入れて記した。

一、翻刻にあたり、原本丁数表（オ）裏（ウ）ごとに行数を付した。
二、本翻刻は、本間啓朗・土肥新一郎・宮崎若菜・山口倫香で作成し、
佐々木勇が確認・修正した。

一、原本閲覧ならびに翻刻の御許可を賜わった公益財団法人 阪本龍
門文庫に対し、心中より御礼申しあげる。

二、翻刻

（上 一オ）

1 公事根元抄

2 正月

3 四方拜 一日

4 元正の寅のときに天皇属星をとなへ身つから

5 天地四方山陵を拜し給て年災をもはらひ

6 寶祚をいのり申さるゝ儀にて侍るにや清

7 涼殿の東陞の前砌の外に御屏風をたてめ

8 くらしその中に御座三所をまうけそのまへにしら

9 木の机を置て香華燈などをそなへ此所にして

10 御拜のぎしきありむかしは殿上の侍臣なども

11 四方拜をばしけるにや近比は内裏仙洞攝関大臣家な

（上 一ウ）

1 とのほかはさることもなき也この事いつ初

2 まるとも見えず仁和五年正月とらのこくに

3 天地四方属星山陵をおがみ給ふよし宇多天

4 皇の御記にのせ給たれとも濫觴とは見えす

5 又皇極天皇の御ときにあめをいのり給ふとて

6 南瀬河上に行幸ありて四方を跪拜し給
7 ければ雨五日までふりけるよし日本紀に
8 のせたれは是などをやはしめとも申へからん
9 其うへ属星を拜してさいなんをのそくおもむきは
10 天地瑞祥志といふ書に見えたり
11 供二御薬 一 同日

（上 二オ）

1 元三の儀なり御殿にておこなはる主上晝御

2 座に出御なりて生氣の方の御衣を尋常

3 の御直衣のうへにかさねて奉る配膳の典侍

4 薬頭も生氣の色を着すこのとき先御厨

5 子所の御歯固を供す命婦藏人役送す

6 典侍次第に御前にす御はがためまいり

7 はて、薬子とて小女のいまだ嫁せざるをもと

8 めて是をもちゆることあり屠蘇は小兒よ

9 りのむといふほんもんあればそのために小兒

10 をえらんで今日まづのましむへしこの薬子

11 鬼問よりすゝみて櫛の木丁のもとにさふらふ

（上 二ウ）

1 女官典薬をめして御くすりををもよをす一

2 献に先屠蘇を酒に入れて薬子にのましむ次

3 に銀器にいれて典薬とりて配膳につたふ

4 主上座をたゝせ給て夜御殿のみなみの戸よ

5 り入給て御塗籠のひながしの方の戸にむかふ

6 てたゝせ給へは配膳御さかつきをもちて参ら

7 すこれも屠蘇は東戸にむきてのむ、かし
8 ほんもん有ゆへにや次に女官に返し給へ
9 はこれを後取の人にのましむ一日は四位二日は五
10 位三日は六位藏人也
11 むかしは上戸をえらんで後取にめしけるとか
つごもり
11 や晦日の日奉行の藏人交名をきり帋に
(上 三オ)
1 かきて殿上のすみのはしらにをす也さて
2 二こんには神明白散を供すむかしは肴を
しんめいびやくさん
3 後取の人に給ふことあり大根をたまふ女蔵
しやうこ
4 人給てあふぎにすへてこれをいだす元日は
どたひ
5 人々しやうじんのゆへ「な」といへり江次第に
がしだい
6 見えたり三こんに度障散を供すかくのこ
もく、ほんの名
7 とく御くすりのぎしき三ケ日あり第三日
8 には御湯薬をたてまつる銀器に入たり無
みやうし
9 名指につけて御額ならびに御耳のうらにつ
みさ
10 けらる右の第四の指をかゝめてつくる也こ
いんさう
11 れは薬師の印相にて侍るとかやこの薬の
やくし
(上 三ウ)
1 ぎしきは弘仁年中にはじめらる一人
こうにんねんちゆう
2 これをのめは一家にやまひなし一家にこれを
さかの天皇
3 のみぬれは一里に病なしといふめでたき
ひとさとし
4 功能侍れはとしのはじめに是を奉るにや
くつす
5 供三御節供一 同日
せつくを
6 是も三ケ日の事なり寛平二年二
くはんぺい
7 月の比後院の別當善といふ人におほ
べつたうよしうだの院
8 せられて

9 毎節に
10 てうしん
11 せらる
(上 四オ)
1 諸院宮の
しよいんみや
2 御節供も
せつく
3 これ
4 におなじ
5 異なる
6 ことは
7 侍らす
(上 四ウ・五オ、図絵)
1 是をば朝拜とも申なり辰のときに主上大
てうが
2 極殿に行幸ありておこなはせ給ふなり
ごくでん
3 群臣こと／＼礼服を着してさながら御
ぐんしん
4 即位のぎしきに同じ内辨などもあり開
き
5 門などありてめしの鼓をうたしむれば群
もん
6 臣列して門に入天子高御座につかせ給へは
しんれつ
7 兵庫頭鉦をうつ執醫いで、帳を八字に
ひやうこのかみづら
8 かゝく近仗警蹕を稱じ圖書主殿香を
こんちやうけいむつ
9 たく典侍再拜をとなふ群臣このとき再
ふんのつかさとのもりかう
10 拜す奏賀奏瑞とて二人の者庭にすゝみ
はい
11 拜す奏賀奏瑞とて二人の者庭にすゝみ
は
(上 六オ)
1 て祝し申事あり是は去年のめでたき
しゆく
2 嘉瑞どものあるを國々より申せはそれを
かすい

3 しるして今日これを奏する也その時郡臣
 4 再拜す次に舞踏すれば武官万歳の旗を
 5 ふる也いとめてたきぎしきとも也神武
 6 天皇元年正月一日橿原の宮に都をたて、
 7 はしめて位につかせ給けるとき宇摩志摩
 8 治命天瑞をそうせるよし日本紀にみえた
 9 り孝徳天皇大化二年正月一日帝拜の事
 10 侍るよし同書にのせたり是をまことの朝拜
 11 とは申べからんしかるに一条院正暦よりのち
 (上
 1 六ウ)
 2 は有とも承らすまた記録にも所見なきに
 3 やいにしへは大極殿もありしかは也今は小
 4 朝拜はかりになりにけり
 5 小朝拜 同日
 6 この事はたゞ臣下として元日にてあれば
 7 天子を拜し奉るへきよしを申うけておこな
 8 へる公事にて侍ればさして朝廷のためにも
 9 侍らす神事佛事にもあらずされは是は
 10 わたくしの礼なり君子に私なしといふ文
 11 ありよろしからざることゝて延喜の御宇
 12 に勅ありて延喜五年より左大臣時平公
 (上
 1 七オ)
 2 におほせてとゞめさせ給し也抑朝拜は
 3 百官ことくく拜すといへとも小朝拜はたゞ
 4 殿上ばかりなり百官ひとしからざるゆへに
 5 わたくし有ににたりとてとゞめさせ給しに

5 や然るに臣下ども元正の日君を拜し奉
 6 ることをしきりに申うけしかは同十九年又
 7 ものごとくおこなはれ侍し也そのゆへは
 8 延喜五年に臣下の拜をばとめさせ給しかと
 9 も當代の親王達は猶拜礼のぎしきあり
 10 それ臣子の道はあひかはるべからすいかでか
 11 臣下のみをばとゞめらるべきとてかたく申
 (上
 1 七ウ)
 2 うけしよし貞信公御記にのせられたり
 3 関白大臣以下天皇をおがみ奉るぎにて侍り
 4 清涼殿の東庭に四位五位六位にいたる
 5 まて袖をつらねて舞踏するなるべし
 6 上よりしておほせらるゝ事にてもなけれ
 7 は下として
 8 人々祇候のよしを先
 9 無名門のまへ
 10 弓場殿にたちつらなりて
 11 上首の人
 12 蔵人頭をもて
 (上
 1 八オ)
 2 そうもんすそのゝち
 3 みかど出御なりて
 4 小朝拜のぎしき侍るなり
 5 朝拜を略するによりて
 6 小朝拜とは申にや
 7 されば
 8 朝賀あるとしは

8 おこなはれさる
9 なんかし

(上) 八ウ・九オ、図絵
(上) 九ウ

元日節會 同日

1 そのぎ小朝拜はてぬれば内辨大臣陣座
2 につきて事をおこなふもし一上にあらずして
3 位次の大^{だいじん}臣^{しん}ならは内辨にさふらふべきよしを
4 識事^{しきじ}をもておほせらるゝ也大かたよろづの
5 公事^{こうじ}を一上たる人は前をわたすましきにや
6 陣のはしの座にて藏人をまねきて外任奏を
7 そうす宮のふたに入たり藏人内侍につきて
8 そうもんす是を御らんして返し給また諸
9 司奏^{ししう}は内侍所につぐへきよしをそうすいにしへは
10 庭にすゝみてそうしけるとかや諸司奏とは七
11 (上)

一〇オ

1 曜御曆氷様腹赤御贄などの事也七ようの
2 御曆は中務省よりたてまつる日月火水木
3 金土の七曜をしるしたるよのつねのこよみ也
4 氷様は宮内省より奉る也去年のこほりを
5 おさめをきたる所々の様を今日節會のつみで
6 にそうもんする也あつさうつさいかほどの寸法
7 に侍るなどこまかにそうす氷様とて近代は石
8 瓦のわれを奉る也延喜式にも氷池風神祭
9 など侍り氷のおほくあるは聖代のしるし氷の
10 ゐぬは凶年にて侍ればこほりの御いのりとして大

11 ほうひほうをおこなはれけるとかや今日もよく
(上) 一〇ウ

1 こほりてめでたきよしのためしをそうする也
2 むかし仁徳天皇の御宇六十二年五月に額田大
3 中彦皇子闕鶏野といふ所にかりしに出給
4 しどきに山上より野中をのぞみ見やり給しか
5 は庵をつくりたるやうなる所あり人をつかはし
6 て見せ給ふに窟なりと申すそのとき稲量
7 大山主といふ人かの野のあたりに侍しをめ
8 して野中にあるは何の窟ぞととはせ給へは
9 氷室なりと申す皇子のたまはくそのこほりを
10 はいかやうにしておさめたるそ又なにゝかもちゆ
11 るそとゝはせ給へはこたへて云土を一丈あまり

一一オ

1 ほりて草をその上にふきて茅萱などをあつく
2 とりしきて氷をおさめたるに夏月をへてもと
3 けずこれをととりて熱月に酒をひたしてもちゆ
4 となんそのとき皇子このこほりを仁徳聖帝に
5 奉り給ければ斜ならずゑいかんあるよし日
6 本紀などにものせたりこれ氷をたてまつるは
7 じまり也其のちより季冬ごとにこれをおさめて
8 國々所々に氷室ををかれ侍し也又腹赤御
9 贄とは魚をつくしよりたてまつるなりむか
10 しはやかて節會などに供じけるにやはらかの
11 くいやうとてくいさしたるをみなとりわたして
(上) 一一ウ

1 食なり景行天皇の御ときつくしひこの國う
2 どのこほり長濱にて海人これをつりて奉る
3 その、ち聖武天皇の御とき天平十五年正月
4 十四日太宰府よりこれをたてまつりけりそ
5 れよりして毎年の節会に供すべきよしさ
6 だめをかる腹赤とは鱒といふ魚の事也此三
7 色をそうするを諸司奏とは申なるへし刻
8 限にのぞみて御門南殿に渡御なりて御帳の
9 内につかせ給ふ内辨陣座を立て陳マの後よ
10 り靴をはくこれよりさきに諸卿外辨につく
11 長樂門のひんがしのわき也是は大内にての
(上) 一二オ
1 事也いまの世にはびんぎの所に幄屋をかまへ
2 てつく也内辨宜陽殿の兀子につくその、ち
3 謝座のぎありて階をのぼりて堂上の兀子に
4 つくこの間のさほう進退そ内辨の大事に
5 て家々の口傳故實など侍る事なめり囲門
6 をおほせて舍人二音めす大舍人四人唯稱す
7 少納言につけしめせは少納言諸卿をめす次第
8 に外辨の上首よりす、みて承明門をいりて
9 南庭に列立す親王の後、大臣その後、大納
10 言その後、三位中納言その後、四位宰相た
11 つ二位中納言は大納言のすゑにおめる三位宰相
(上) 一二ウ
1 は中納言の末におめる異位重行に立定りての

2 ち内辨敷尹をおほす敷尹は敷居也堂上に
3 敷たる座に居よといふ心成へし群臣謝座
4 謝酒昇殿着座す内辨御膳をもよをす下
5 殿してこれをおほす内膳これを供すその、ちや
6 がてわきの御膳を供す大底御膳のくさく、ども
7 名はあれどもそのすがたいづれもわかちがたし
8 黏臍饅餠餠桂心などやうの物なり饅餠
9 索餅はめぢかき物なれは誰も見をよびたる物
10 にや三献のぎあり一こんには國栖哥笛をそ
11 うす是は吉野の國棲人の事なり應神天
(上) 一三オ
1 皇十九年十月に吉野宮に行幸ありしとき國
2 栖人まいりて醴酒をたてまつりて哥をうたひ
3 けりこの國栖人は山の木のみをとりにてくひ又蛙
4 を煮て毛瀾となづけて美味ありとてくひける
5 とかや吉野の川上にゐて峯けはしう谷ふかき
6 所なれは路さがしく侍るゆへにつねに來朝する
7 ことかなはずとなん申ける其のちはつねに參
8 て年魚やうの物をたてまつりけるとかや今の世
9 に國栖奏とて哥をうたひ笛をふきならすは
10 としのはじめに吉野より參たるといふ心なり
11 二こんには御酒のちよくしのぎあり三こんに
(上) 一三ウ
1 立樂をのく二曲をそうすその、ち宣命の拜
2 などいふ事ありさのみはくだしければはる
3 すにをよはす其うへいつもの節会なれば誰も

4 おぼつかなく候はし抑この節會は天子紫震
殿にとぎよなりて群臣百官に酒をたまふて
5 宴會あるぎなり持統天皇四年正月に公卿を
6 内裏にめしてとよのあかりするとあり宴會と
7 かきてとよのあかりとよめり大かたの節會
8 の名にて侍るにや豊明節會にかざるべからず
9 神武天皇の御宇にも群臣をつどへて酒を
10 たまひし事は日本紀にみえたり是などを
11 (上 一四才)
1 事のおこりとは申へきか
2 光仁天皇寶龜四年の春よりは
3 五位已上に衾をたまはりけり
4 今もさやうのこゝちにて
5 事はて、
6 祿をたまふ
7 ことあり
8 (上 一四ウ、図絵)
9 (上 一五才)
10 内侍所 御供 同日
11 是は毎月に供ぜらるゝなり寛平年中にはじ
12 めらるこのないし所と申は三種の神器のその
13 一なりちはやふる神代の事にや天照太神
14 あまのいは戸をさしてこもり給ける時石凝
15 神のいうつし給ふ日神の御かたちの鏡
16 なりこれを八咫のかぐみとなつくそのゝち
17 地神第三代天津彦々火瓊々杵尊あしは

9 らの國の主となり給てあまくだり給しとき
10 天照太神みづから三種の神寶をさづけ給ふと
11 て此かゝみをば我を見るがごとくせよとのたまひし
12 (上 一五ウ)
13 なり代々のみかどつたへて寶物とし給しに
14 人皇第十代崇神天皇の御ときこの御鏡をいかへ
15 られて神代よりつたはりし御かぐみをは伊勢
16 國五十鈴川上にあがめ申さる是すなはちいま
17 の伊勢皇太神宮なりさてかのしんさうの御か
18 がみをは皇居に置申さる垂仁天皇の御宇には
19 やうやく神威をおそれさせ給て別座に安置
20 申さる温明殿これなり村上天皇の御宇天
21 徳のぜうまふのときは此御かぐみ灰の中に有
22 てさらにやけそんずることなりしよし御記に
23 のせられたりある説に神鏡南殿の櫻のき
24 (上 一六才)
25 にとびかゝりて有しを小野宮関白の袖にうつ
26 し申され侍りしといふ説も侍れとなを
27 村上の御記をそ實説とは申べからん寿永の
28 乱に二位の尼先帝をいだき奉りてわだづ
29 うみのもくづと成し時もこの御鏡はことゆへなく
30 都へかへり給けるぞかしいまにいたるまで神
31 宮とひとしくあがめ申されてあからさまにも
32 主上は神宮内侍所の方をは御あとにはせられ
33 侍らぬ事なりまた同殿に御座ありし時は
34 主上は御髻をはなたれぬ事にて御かふりに穴

11 をあけ糸いとをとをしてゆはれけるにや主上しゅじやうの
 (上 一六ウ)
 1 御みかふりにはかならず穴あなをあくるはこのゆへ也
 2 いまは内侍所ないしどころにあがめ申されて女官にょくはん守護しゆごを
 3 いたす白河院しらかわのいんおほせられけるはないし所の神鏡じんきやう
 4 とび出て天てんにあがらんとし給しを女官にょくはんの衣きぬの袖そでに
 5 かけてと、め申けるよりして女官にょくはんは守護しゆごし申
 6 事に成たるとなん一日の御供ごくうは毎月まいげつの事
 7 也御即位ごくわいのときはとりわきて供ぜらるゝ事あ
 8 りそれは吉日きちにちをえらはる是はた、毎月まいげつの事
 9 なれば日次ひついでの吉凶きつこうによらず内裏たいり触穢しよくそでの
 10 きもなを供ぜらるゝ例れいありまたとゞめらるゝ
 11 事も侍る也
 (上 一七オ、図絵)
 (上 一七ウ)
 1 供くうニ若水わかつみづ一 立春りつしゆんの日
 2 わか水みづといふ事は去年こぞの御生しやうけ氣けの方ほうの井い
 3 を点じてふだをして人にくませす立春りつしゆんの日
 4 この水をくみて主水司もんどのかみ内裏うちにたてまつれば朝あさ
 5 餉かれいにてこれをきこしめすなりあら玉たまの春はる
 6 立日たちひこれを奉ほうれば若水わかつみづと申にや年中ねんぢゆうの
 7 邪氣じゃきと「五ミゼケ」のぞくといふほんもんあればことさら
 8 これを供くうずる也江帥匡房卿かうそつまさふさのきやうの次第しだいには若わか
 9 水みづをのむとき咒じゆとなふること有とみえたり
 10 供くうニ若菜わかな一 上子日かみのねのひ
 11 内蔵寮くらうつかさ 井内膳司かしたでのつかさより正月上子日ねのひこれを

(上 一八オ)
 1 奉ほうるなり寛平年中くわんぺいねんぢゆうよりはじまる事にや
 2 延喜十一年正月七日えんぎじゅういちねんしょうげつにち後院こういんより七種しちしゆのわかな
 3 を供くうずまた天曆四年二月廿九日てんりやくしやうねんにち女御にょみ安子朝あしあさ
 4 臣みこわかなを奉ほうるよし李部王りほふおう記に見えたり
 5 わかなを十二種じふにしゆ供くずることあり其くさくは
 6 若菜わかな 薺はこべ 芹せり 蕨わらび 薺なつな 葵あふひ 芝よろいぐさ 蓬よもぎ 水蓼たで
 7 水雲すいり 松まつと見えたりこの松の字の事説せつ々
 8 あり白河院しらかわのいんに松をたてまつりたる人有わかつけり
 9 大外記おほいそぎ師遠しゑんに御たづねありければ若松わかつまつとかき
 10 てこうほねとよむなりもしこの事にて侍るか
 11 と申きさては松をそへてたてまつるはひがこと也
 (上 一八ウ)
 1 と上皇じやうかうおほせられ侍りきよのつねのわかなは
 2 七種しちしゆの物なり芹せり 薺はこべ 薺なつな 薺すくなく 御形ごぎやう すゞしろ
 3 ほとけのさなと也 正月七日しょうげつにちに七種しちしゆの菜羹さいかう
 4 を食しよくすればその人よるづの病やまひなし又邪氣じゃき
 5 をのぞく術じゆつ侍るとみえたり
 6 子日遊ねのひのあそび
 7 是はむかし人々のべ野邊のべに出て子日ねのひするとて松
 8 を引ける也朱雀院しゆくしやくいん圓融院えんじゆういん三条院さんじやういんなどの御
 9 時にもこの御遊あそびは有けるにや中にも圓融院えんじゆういんの
 10 子日ねのひせさせ給けるは寛和元年二月十三日くわんわげんねんにちの事
 11 也みちのほどは御車くるまなりしが紫むらさき野のちかくな
 (上 一九オ)
 1 りて上皇じやうかうは御馬ごまにめされけり左右大臣さうふだいじん以下

2 これ直衣にて殿上人は布衣なり幄屋をまう
3 け幔をひきめぐらし小庭となして小松をひ
4 しとうへられたり籠物折櫃破子やうの物を
5 奉り人々和哥を献すそのときの序者は
6 平兼盛とかや清原元輔曾根好忠などいふ
7 哥人ともに侍しさだめてかのときの哥など
8 は代々の集にいりつらんかさねて引勘へし

(上 二一ウ)
一九ウ・二〇オ、図絵)

御杖 上 卯日

2 持統天皇三年正月上卯日大学寮よりた
3 てまつるよし日本紀にありまた仁壽二年正
4 月に諸衛祝杖を献して精魅をおふとみえ
5 たりこれをもて悪鬼をはらふ心地なり作
6 物所よりすはまをつくり物にしてそのうへに
7 巖の中に御生氣の方の獸をつくりて卯杖
8 にあはしむたとへは生氣ひんがしにあらは
9 る延喜式には正月の卯の日兵衛督以下ま
10 いりて御杖をそうするぎありいろ／＼の木
11 (上 二一オ)

1 を五尺三寸づゝにきりて二束三束に結てた
2 てまつるを御杖といふよし見えたり
3 二宮 大饗 二日

4 二宮とは東宮中宮を申なり王卿以下本
5 宮に参じて拜礼の事あり次に玄輝門の

6 東西の廊にして饗につく先中宮の饗に
7 つく次に東宮の饗につく三献のぎあり天
8 長七年正月に群臣皇后を拜し奉り衾
9 をたまはる又皇太子を賀すとありたえて久し
10 き事にこそ
11 朝観行幸 同日

(上 二一ウ)

1 是は天子としのはじめに上皇并 母后の宮に
2 行幸なることなり嵯峨天皇大同四年八月
3 に朝観の儀ははじまる嘉祥二年正月廿日仁
4 明 御門母后にてうきんのために冷泉院に行
5 幸なるかのときみかど南階を下て笏をたゞ
6 しくして跪 たまひしことも侍るにや周礼に
7 春を朝といひ秋を覲といふとみえたり是てう
8 きんの心なり漢高祖は五日に一度父の太公
9 に朝せられたりひとのみかだにもその例ある
10 事にこそまた春宮成人の御時は朝観のぎ
11 あり元正 御門養老二年正月に大極殿に出

(上 二二オ)

1 御なりて東宮参昇たまふ其のちはたび／＼
2 のことなりまた天長十年三月に淳和 御門紫宸
3 殿に出御なりて東宮王九才てうきんのきあ
4 り拜舞して昇殿の、ち御衣をたまふ東宮
5 これをとりて拜舞してまかで給ふ容儀ことに
6 成人のごとしなど國史にしるせり是は恒貞親

7 王の九さいの時のことなんかし文王世子たりし
8 とき王季に朝すること日に三度など礼記
9 にみえたり是などを東宮てうきんの例とも
10 申へからん

(上)
(上二二ウ、図絵)
(上二二オ)

臨時客 同日

2 是は攝政関白家春のはしめ大臣以下上
3 達部を招引してあそび侍ることなりさた
4 まれる公務にあらねば臨時客と申にや大方
5 大臣の母屋の大饗はとしをへておこなひ侍し
6 ぞかし鷹飼などわたりてその興あることにて
7 侍りき是は藤氏の長者朱器の饗をまうけ
8 侍る也大臣家には様器の饗をそなふるなり
9 臨時客にも尊者などありてよのつねの大饗
10 のぎしきに同しはてつかたには御遊ありて
11 催馬樂をうたふちか比は攝関家にもかやうの事

(上二二三ウ)

絶たるぞ念なく侍る

視告朔 三日

3 是は百官の行事上日を文して毎月天子の
4 御らんぜらるゝ也告朔の文をみそなはずと
5 申心也天子大極殿に出御なりて見たまふ
6 文武天皇五年九月には雨によりて告朔なし
7 と日本紀にあれば此時よりさきにはじまりぬ
8 としりぬへし論語にいへるは毎月告二朔 庶一

9 といへりそれをも告朔といへり字は同じけれと
10 心はかはれり言捻意別とはかやうのことにや
11 この事は一日にあり又四日などにもある也

(上二二四オ)

視告朔とかきてたゞかうさくと二字によむ

2 口傳にて侍るよし也こくさくとはよむへからす

御國忌 四日

4 正月四日は村上天皇の母後の御國忌なり天
5 曆九年の正月に御門宸筆をそめられ法華
6 經をあそばして弘徽殿にて御八講のぎ侍り
7 きその、ち法性寺にて毎年御八講おこなはる
8 るにさしたる事なし大かた法華八講と
9 いふことは勤操といふ沙門延曆十五年よりおこ
10 なひはじめけるにや石渕の八講とこれをいふ也
11 十講三十講も同じくこの沙門のはじめておこ

(上二二四ウ)

なひけるとこそ承れ

叙位 同日 近代 五日

3 其儀大臣以下左仗の座につきて先事をもよ
4 をしおこなふ次に議所につきて勸盃のぎしきな
5 どありちか比はこの事たえて侍るにこそ次に
6 蔵人して諸卿をめす公卿射場殿にてはこ
7 文をとりにて次第に御前の座につく関白并
8 執筆めしによりて圓座にすゝみつく執筆
9 十年の勞をそうし續紙をめし位を次第に
10 叙す源藤橘の氏の爵の申文入内一加階

11 の勘文^{かんもん}などいふ事侍りさのみはくだ／＼しけれ

1 (上 二五オ)

はしるすにおよはす推古天皇^{すいこてんかう}十一年十二月に

2 はじめて冠位^{くわんみ}をおこなはる大徳小徳大仁小仁大礼

3 小礼大信小信大義小義大智小智この十二階也

4 いまは是にはかはりたることなれとも位のおこりを

5 申さんには是なんかし天智天皇^{てんちてんわう}十四年正月に

6 諸王諸臣に爵位をたまふとみえたり此叙位も

7 とは六日にて侍しを天徳五年より五日にはしめ

8 てこのぎありあかつきなどにをよべば七日の節会

9 の懈怠なりとてとりあげられけるにこそされば

10 いまにいたるまで五日にさだまれり主上もしは

11 執柄などの衰日にあたれば六日におこなはる、

(上 二五ウ)

1 こともつねの事なり

2 白馬^{あをむま}節會 七日

3 この節会^{せちえ}の事大かたは元日^{げんじつ}なとに同じ元日

4 は氷様^{ひのたま}腹赤贅御曆^{はらにきりやく}などあるによりてをしなへて

5 諸司奏といふ也今日は兵部省よりたてまつる

6 御弓^{みこう}の奏ばかりを内辨もそうもんするなり

7 もし卯日^{うひ}にあたれば今日も諸司奏といふへ

8 し卯杖^{うづえ}奏あるによりて也しからざるときは

9 た、御弓^{みこう}奏候哉とおほす天竺^{てんぢく}の貝多羅葉は

10 その長七尺五寸なり弓のたけも七尺五寸なる

11 ゆへに是をたらじとは申にや白馬^{あをむま}節會を

1 (上 二六オ)

あるひは青馬^{あをむま}の節とも申なり馬は陽^{やう}の獸^{けもの}

2 なり青^{あを}は春^{はる}の色なりこれによりて正月

3 七日あをむまを見ればねんぢうの邪氣^{じやくき}を

4 のぞくといふほんもん侍るなり仁明^{にんめい}御門承^{かどせう}

5 和元年正月豊樂院におはしましてあを

6 むまを見給ふ同六年正月には紫宸殿^{ししんでん}に

7 て御らんせらるされはこの馬の事礼記に春

8 を東郊^{とうかう}にむかへて青馬^{せいば}七疋をもちゆと有

9 七は少陽^{せうやう}のかず正月は少陽の月なり又

10 十節録に白馬^{はくば}を馬の性^{しやう}の本とす天に白

11 龍あり地に白馬ありまた天の用は龍也

(上 二六ウ)

1 地の用は馬なり人の用は龜なりと申本

2 文も侍るにやいまの節會に三七廿一疋を

3 ひかるゝは是三は三才にかたどり七は七日

4 にあつるよし寛平^{かんへい}の御記にのせられたり

5 今日^{けふ}の毛づけのそうにもみなあしげと

6 ばかりあり是白馬^{はくば}を本とするゆへなり

7 ぎしきなどは大かた元日^{げんじつ}に同じ

8 そのうへいつもの

9 事なれはしるすも

10 めつらしからぬやうなれば

11 かきのせす

(広島大学日本語史研究会)

(上巻、続く)